

森の植物に夢中になる人びと

「むら」と「まち」での植物文化

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林講師 齋藤 暖生

はじめに

森林は高い木をはじめとした各種の植物のみならず、大小の動物、昆虫、菌類など実に多様な生き物からなる。それぞれに魅力を感じる人びとがいるが、ここでは植物に限って見ていきたい。

人が森の植物に魅力を感じて行動を起こすとき、大きく二つの方向性があるだろう。一つは、その植物が生育する森に出かけて行くことで、もう一つは、森から植物を連れ出して身近な範囲で育てることである。これら対極にある方向性の中で、それぞれ「人が夢中になっている」と言える例を一つずつ取り上げることで、人が夢中になる要素を考える端緒としてみたい。

遊び仕事としての山菜採り

まず、人がある植物に夢中になって森に出かけていく例として、筆者が2000年から調査し続けてきた東北地方山村である岩手県西和賀町における山菜採りを取り上げる。

山菜採りは、食べ物を得るための行為であることに間違いない。しかし、食品の栄養価から見ると、カロリーが低く、生存上必須な食べ物ではない（齋藤 2017a、齋藤 2024）。それなのに、人びとはこれら採ることに熱をあげる。ワラビやゼンマイのほか、モミジガサ（地方名：シドケ）、イヌドウ

ナ（同：ボンナ）など、20 種近い種が採取対象となっている。種類の多さだけではない。人びとは頻繁に山に出かけ、ときに数十 kg にも上る収穫をする（齋藤 2005）。こうした収穫が可能になるのは、広大な山があるからで、人びとはいとわず、奥山へ分け入っていく。そして、その採取活動には、急斜面での滑落やクマとの遭遇などの危険がつきまとう。

栄養価が高いとは言えない山菜を求めて、そして危険を冒してまで、なぜ人びとは山奥へ分け入るのだろうか。その理由のひとつに、奥山においてより質の高い山菜が得られるという事情がある。たとえば、ワラビは集落周辺でも簡単に採取できるが、それらはノッコワラビと称され、雑草と同じような扱いを受ける。それに対し、集落から離れたところで樹木の陰に生えるようなワラビはヒカゲワラビと呼ばれ、形状が大きく食味も良いと珍重される（齋藤 2017b）。

さらに、山菜を採るために奥山に行くということは、大きな楽しみをもたらす。これまで観察した中から、その楽しみを概括すると、山を読む楽しみと、人と駆け引きする楽しみがある。

山を読む楽しみとはどういうことだろうか。図 1 と図 2 を見ていただきたい。図 1 は、山菜が最盛期となる 5 月上旬に集落から見た山の様子である。標高の低いところは新緑、標高の高いところはまだ雪山であり、山菜の旬が山を駆け上がっていることを知ることができる。図 2 は山に分け入って、



図 1 低標高から高標高に進む山菜の旬



図 2 斜面の上から下に向かう山菜の旬



図3 足跡をしっかりとつけながら進むある日の山菜採り

山菜がよく生えるという沢筋を見た時の様子である。沢筋の雪は、斜面の上の方から消えていくので、山菜の旬は沢筋では斜面の上方から下方へ向かって進む。このように、どこでいつ目当ての山菜が採れるかを見定めることは、まるで推理ゲームのようである。

人と駆け引きする楽しみについては、ひとつだけエピソードを紹介しよう。Yさんの山菜採りについて行った時のことである（図3）。

このとき、Yさんは後ろを振り向き、ちゃんと足跡をつけて歩くように私に言った。そんなことをしたら、ここに良い山菜があると他の人に知られることになると思った私は、その理由をYさんに問うた。すると、Yさんはいたずらっぽく笑って答えた。ちょうど良い頃合いと思って来たものの、まだ2、3日早かったと感じた。そのため、足跡をたくさん残せば、後から来た人は、もうこの沢では採れないと判断し他へ行くだろう。そして自分はまた採りに来る、と。山菜採りは「競争」でもあり、良い収穫を得るには、うまく人に先んじることも大事な戦略になる。

山菜をめぐる競いはするが、山菜はむしろ地域の人間関係をつなぎ止め

ている。奥山から採ってきた良質の山菜は、ご馳走でもあり、おすそ分けや集まりへの持ち寄り料理によく使われる（齋藤 2017b）。その際に、それを採るまでにどんなことがあったのか、など山談義に花が咲く。そして、良い山菜を採れたことが賞賛される。その喜びをまた味わいたくて、人びとは奥山を目指すのだ。

このように見てくると、山菜採りは食材獲得という実利はありつつも、その行為に潜むいくつもの楽しみに突き動かされて成り立つ活動とも言えそうだ。こうした娯楽性を秘めた「遊び仕事」と呼べるようなものは、自然を相手とする生業に多く見出される（安室 2012）。

栽培される植物

人がある植物に魅力を感じたとき、それを植えることによって確実に手に入れたり、手近に置いたりすることがある。これが栽培化であり、世界中のどの地域でもほぼ例外なく見られることである。日本の森林には、上で見た山菜のほかにも数多くの食用植物がある。しかし、栽培化により品種作出まで至っているものにクリやワサビなどの例はあるものの、その数は驚くほど少ない。日本において栽培されている野菜のほぼ全ては、日本以外を原産地とする、もしくは日本以外で栽培化された植物である（青葉 2013）。日本で利用されてきた山菜の多くは、多年生のため育成に時間がかかる点や、変異（後述する「変わり物」）が出にくい点で、「もともと野菜になりにくい、あるいはなり損ねた」（青葉 1981）ものとされている。

いっぽう、食用としない植物に目を転じると、日本の森林の植物は、世界的にみて顕著な栽培化が行われてきた。それが園芸植物である。日本で作出された園芸植物の中には、日本以外を原産地とするものもあるが、サクラやツバキなど日本に自生する植物からも多くの園芸品種が作出されてきた。表 1 は、もくほん木本植物に限って日本原産の園芸植物を整理してみたものであるが、草本植物にも、オモト、ギボウシ類、サクラソウ、ユリ類などの園芸品種化された植物が数多くある。

一般に植物を栽培するには、生活史の短い植物、特に 1 年生草本が容易である。中尾佐助は、栽培植物としてサクラのような高木までも対象にした

表1 日本の森林から得られた木本性園芸植物の品種分化

植物名	学名	黎明期	発達期	最多品種数	現存品種数
イロハモミジ	<i>Acer palmatum</i>	江戸前期	明治前期	219	150
ガクアジサイ	<i>Hydrangea macrophylla</i>	江戸後期	平成		120
サクラ	<i>Cerasus</i> spp.	鎌倉	江戸中期		300
サザンカ	<i>Camellia sasanqua</i>	元禄	文化文政	242	200
サツキ	<i>Rhododendron indicum</i>	江戸初期	昭和後期		2000
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>	江戸後期	明治	50	20
ツツジ	<i>Rhododendron</i> spp.	江戸前期	江戸中期		1000
ナンテン	<i>Nandina domestica</i>	江戸後期	明治前期	120	50
フジ	<i>Wisteria</i> spp.	江戸後期～明治	昭和～平成		30
ホンシャクナゲ	<i>Rhododendron japonheptamerum</i>	江戸後期	昭和初期	49	18
マツ	<i>Pinus</i> spp.	江戸前期	江戸後期		150
ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>	室町	江戸中期		2300
ヤマアジサイ	<i>Hydrangea serrata</i>	平成	平成		50

資料：仁田坂（2009）をもとに筆者作成

注：学名中のsppは複数種を含むことを示す。

のは、世界的に見て日本や中国の特徴であると指摘する（中尾 1986）。さらに、日本原産ではないがウメについてみると、日本では果樹としてよりは圧倒的に花木としての品種分化が発達したとする。

どうやら日本人は、植物の栽培化にかけては、食用としてよりは観賞用として育てることに心血を注いできたようだ。「花より団子」とはいうが、「団子より花」でもある日本人の特性が見えてくる。

花木へのマニアックな愛

食えない花に対して、日本人はどのように心を寄せ、愛でる文化を高めていったのだろうか。歴史をたどりながら考えてみたい。

日本人が花を愛でていたと明らかにわかるのは、万葉集からだという（中尾 1986）。たとえば、のちに秋の七草とされる草花の名を挙げて詠んだ山上憶良の歌がある。それら草花は、森林というより草原の植物であり、人が森を野に切り拓いた結果として人の目につくようになった植物である。日本人がこよなく愛するサクラも、人が攪乱することで成立した二次林に多く出現する。つまり、日本人が花を愛する前提条件として、森林が攪乱されることで生まれた植生環境がある（佐藤 2007）。

野山から花木を連れ出して育ててきた経緯はどうだろう。日本において庭

園が作られるのは、飛鳥時代以降であるようだ。当初は中国大陸から伝来した様式を踏襲し、枝垂れヤナギやハス、ウメなど渡来植物が主に植栽されていたと推定されている。その後、平安時代からは庭園も国風化が進み、サクラやマツなど、日本在来の植物が庭園に取り入れられていった（飛田2002）。

庭園を設けたのは、皇族や貴族など都の上流階級である。飛鳥時代には渡来人が作庭を担っていたが、平安時代には僧侶の中から庭づくりを準専門職とする者が現れた。室町時代になると、完全に専門職として庭づくりにあたる人びとが現れた。彼らは、京都の河原に小屋掛けして暮らす、河原者と呼ばれる人びとであった。後述する園芸の大発展期となった江戸時代には、都市近郊の農民から園芸を専門とする業者が現れた（前島1993）。

庭づくりに専門的に従事した人びとの存在は、日本の森の植物から園芸品種が生み出される素地となったと考えられる。表1に立ち戻ってみると、最も早い時期に品種分化が行われたのはサクラである。サクラはすでに平安時代に八重咲きや枝垂れの性質を持つものがあった。八重咲きつぎきのものは中国伝来の接木の技術によって増殖されたことが明らかで、枝垂れのものは種子からの増殖・選抜であったと推定される（勝木2015）。専門職がいたからこそ、こうした技術が継承・発展されたに違いない。

園芸植物を専門的に扱う職業は、江戸時代になって急速に発展する。まず、最高権力者である将軍たちが「花癖」と呼ばれるほど、園芸植物に特別な嗜好を持っていた（中尾1986）。当時の江戸には、参勤交代のため諸国の大名が広大な敷地を持つ屋敷を構えており、平和な世を生きる武家は庭づくりに注力するようになった（湯浅2010）。将軍・吉宗の代にサクラやカエデを群植した公共園地が整備され、庶民も園芸植物に親しむようになり、園芸趣味は町民の間にも広がった。こうした中で、種樹家・樹芸家・樹斎・樹木屋・栽種樹家・地木師・盆栽師・山師・芸植家など、実にさまざまな名称で呼ばれる園芸業者が成立した（前島1993）。これは単に呼び方の違いであることもあるが、変異株の山採り、育苗、販売など分業化が進んだ結果でもあった。こうした業種群の中に、品種の作出に長けた者たちがいた。

江戸時代には数多くの精巧な図譜が出版されたが、それにより極めて個性に富んだ園芸品種が生み出されていたことを知ることができる。そもそも園



図 4a



図 4b



図 4c

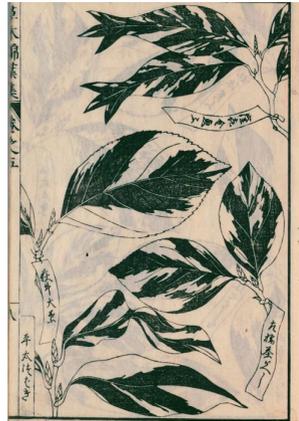


図 4d

図 4 江戸時代に描かれた園芸植物の品種

a サクラ「大和さらさ桃」（『浴恩春秋両園櫻花譜』）、b ツツジ「絞淀川」（『躑躅譜 2 巻』）、c カエデ「紋錦」（『古今要覧稿』）、d 斑入りのツバキの葉（『草木錦葉集 巻 5』）、いずれも国立国会図書館デジタルコレクションより

芸品種が作られたということは、野生では極めて珍しいものが見出されたということ、または、育てる中で全く新しい形質を持ったものを選び取ったり、作ったりしたということである（仁田坂 2009）。つまり「変わり物」を見出し、作り出すことが品種分化の目的となっていた。図 4 のサクラ (a) と ツツジ (b) は八重咲きで、かつ花卉は 2 色であり、野生で見られるものとはかけ離れた特徴を持っている。カエデも周年紅葉しているものや、図 4c

のように葉の切れ込みが特徴的な品種が生み出された。

「変わり物」を求める風潮の中でも、斑入りの葉は、日本で特有の嗜好として発達した（湯浅 2012、安田 2023）。花が主役と思われるツバキも、斑入りの葉を愛でるものとして数多くの品種が記録されている（図 4d）。図 4b のツツジも葉を見れば斑入りである。

こうした「変わり物」の追求によって、膨大な園芸品種を生み出した江戸時代の園芸界であるが、それは単純に美しさの追求と割り切れない。中尾（1986）は、誰もがわかる明快な美しさがあるとしつつも、一定の教養があってはじめて鑑賞に適うものもあるとする。江戸時代には、園芸植物の品評会が行われるなど、品種作出の腕が競われていたし、稀少性の高いものについては投機的な取引も行われていた（湯浅 2011）。こうした中で、珍奇さを重視した「変わり物」も求められた。

江戸時代に生み出された多くの「変わり物」は、日本以外では理解されず、明治以降、西洋の価値観を取り入れた日本の中でも顧みられなくなった（中尾 1986）。こうして、伝統的な品種群を育てることは、事業として成り立ちにくくなる。表 1 において、現在の品種数が、一時期より減少しているものがあることは、こうした事情を反映している。その中でも、サクラは篤志家によって人工交配が試みられる（池谷 2014）など、庶民が趣味的に伝統的な園芸品種の栽培を担ったこと（白幡 2007）に着目しておきたい。

おわりに

以上、人びとが森の植物に夢中になる二つの事例を見てきた。冒頭で触れたように、これら二つの事例は対極的なものである。山菜採りの例では、夢中になったがゆえに人は奥山へ向かい、園芸植物の例では、植物を森から人の世界に向かわせる振る舞いが見られた。そして、前者は「むら」において人びとが夢中になった帰結であり、後者は「まち」においての帰結であるという点でも対極的である。

対極的であるなかにも、共通点が見える。それは、生物学的な意味でのヒトの生存には必ずしも必要のない、実利を度外視しても成立する振る舞いだという点である。その振る舞いを支えるのは、一言でいえば「遊び心」とい

うことになるだろうか。また、人が夢中になるような植物の価値は、人と人との交流の中で高められてきたという点も共通している。日本の森林植物は村人も都会人も夢中にさせてきたが、その背景には、人びとの「遊び心」とそれを共有するコミュニティがあったとすることができるだろう。

[引用文献]

- 青葉高 (1981) 野菜 (ものと人間の文化史 43), 法政大学出版局
- 青葉高 (2013) 日本の野菜文化史事典, 八坂書房
- 池谷祐幸 (2014) 桜の鑑賞と栽培の歴史—野生種から栽培品種への道—, 森林科学, 70: 3-7
- 勝木俊雄 (2015) 桜, 岩波書店
- 齋藤暖生 (2005) やっぱし、んめえなあ!—山菜, 地理, 50(7): 56-60
- 齋藤暖生 (2017a) 山菜・きのこにみる森林文化, 森林環境 2017: 12-21
- 齋藤暖生 (2017b) ありふれたごちそう—山菜の魅力, 森林科学, 80: 22-25
- 齋藤暖生 (2024) 食べられる森林資源: 山菜やキノコを中心に, 森林技術, 984: 2-6
- 佐藤洋一郎 (2007) 人が花に出会ったとき, 日高敏隆・白幡洋三郎編, 人はなぜ花を愛でるのか, 八坂書房
- 白幡洋三郎 (2007) 花を鑑賞する、花を育てる—花を愛でる美意識, 日高敏隆・白幡洋三郎編, 人はなぜ花を愛でるのか, 八坂書房
- 中尾佐助 (1986) 花と木の文化史, 岩波書店
- 仁田坂英二 (2009) 品種分化をめぐる—古典園芸植物のドメスティケーション, 国立民族学博物館調査報告, 84: 409-443
- 飛田範夫 (2002) 日本庭園の植栽史, 京都大学学術出版会
- 前島康彦 (1993) 樹芸百五十年 (改訂版), 株式会社富士植木
- 安田容子 (2023) 江戸時代後期における奇品の流行一斑 (まだら) のちいさな生き物へのまなざし, ピオストーリー, 39: 18-19
- 安室知 (2012) 日本民俗生業論, 慶友社
- 湯浅浩史 (2010) 日本人が育てた花の多様性, ピオストーリー, 13: 35-41
- 湯浅浩史 (2011) 植物を競う, ピオストーリー, 16: 46-53
- 湯浅浩史 (2012) 斑入り植物の歴史と多様性, ピオストーリー, 18: 16-23